

午前11時00分 開始

【秘書広報課長補佐】 お待たせをいたしました。

定刻の時間となりましたので、ただいまより平成27年4月市長定例記者会見を始めさせていただきます。

最初にお知らせを申し上げます。

記者クラブのほうに異動がございまして、本日初めて会見に参加されます記者の方を紹介させていただきます。

【記者】 (挨拶)

【秘書広報課長補佐】 ありがとうございます。

それでは、本日の会見の進行につきましては、次第のとおり、最初に市長の挨拶、その後2項目について事業発表をさせていただきます。質問につきましては、事業発表についてからお願いしたいと思います。事業発表に係る質疑応答の後に3番目のフリーの質問へ移らせていただきたいと思います。終了は12時を予定いたしております。ご協力のほどよろしくお願いします。

それでは、市長、よろしくお願いします。

【市長】 それでは、まず、昨日、敦賀気比高校が選抜で初優勝を果たしました。多くの皆さん方に応援をいただいたおかげだというふうに思っております。まずもって感謝を申し上げます。特にことは高校野球100年という大変大きな節目の年でありますし、また敦賀気比の優勝というのは、福井県はもとより北陸3県、そして日本海側に面している都市にある高校の中でも初めての優勝でございます。

それと、ことは選手宣誓も引き当てましたし、試合内容にいたしましても記録づくめということでございます。恐らく満塁ホームランを2打席で打つというのは、これから先の長い高校野球続くと思えますけれども、なかなかできることではないんじゃないかなというふうに思っておるところでもございますし、やはりライバルであった大阪桐蔭にあのような形で勝てたこと、また昨日もあれだけ攻められながらもしっかりと守り抜いて勝ちをとったということは、本当に見ている者にとりまして、野球ファンのみならず感動を与えた大変すばらしい試合じゃなかったかなというふうに思っております。

大変、敦賀はもとより福井県中も、また北陸の皆さん方も盛り上がって応援をいただいたわけですが、昔の映像で福商さんがちょうど準優勝したときのああいうパレードの映像が流れるもんですから、実は問い合わせで、なぜ敦賀気比は優勝したのに市として何もしないんだというお叱りなどもいただいております。昼1時半には気比高校、帰ってまいりますので、学校のほうでは祝勝会という形はとるわけではありますが、これは高野連から、やはりアマチュアのスポーツである、特に学生の生徒のスポーツであるということで、そういうことは決して行ってはいけません、自粛をなさいという強いお達しがございまして。実は経済界などでもこれを機会に優勝記念セールをという、今、原子力発電所の停止で大変冷え切っておる私どものまちでございますので盛り上げたいなという気持ちがあるんですけれども、そういうこともぜひ自粛をしてくれというお達しでございましたので、これはアマチュアスポーツ、また生徒、学生のスポーツということでいたし方ないというふうに思っておりますけれども、ぜひこういう報道を通じてそういう皆さん方にご理解をいただきたい、このように思っているところでございます。また後ほど1時半からの祝勝会の中でいろいろとお話をさせていただきたい、このように思っているところでございます。

ところで、私はもうこれで最後の恐らく記者会見になるというふうに思います。過去20年間、記者会見システムをとってまだ数年ですかね、10年たっていないように思いますが、記者クラブの皆さん方には長年にわたって、この記者会見を通じて私どもの市の思い、また私の思いを公正公平の中で伝えていただきましたことを心から感謝を申し上げます。私ども自治体、行政は、やはり的確な情報を住民、市民の皆さん方に出すということが非常に重要でございますので、これからも新しい市長をお迎えになられてもぜひ記者会見を通じていろんなことを聞いていただき、またいろんなことを適切に報道いただければありがたいなというふうに思っているところでございます。

私自身は一市民にはなりませんけれども、またしっかりと将来を見据えながら元気に頑張っていきたい、このような思いを持っているところでもございます。まずは記者クラブの皆さん方に心から感謝を申し上げるところでもございます。

それでは、発表項目に従いまして順次お話をさせていただきますので、よろしくお願い申し上げます。

まず、人道の港ムゼウムの視聴コーナーの動画の追加及び交流コーナーの展示物の入れかえであります。

ご承知のとおり、昨年、レオ・メラメドさんが敦賀にお越しをいただきまして、メラメドさんのコーナーといいますか、またメラメドさんに関する映像等を追加をしながら少し変更していきたいというふうに思っております。

実は一昨日、31日でございましたけれども、ちょうど新聞報道にもございましたけれども、メラメドさん、早稲田大学の学位の授与式というのが昨日ありまして、その記念の前夜のパーティにも出席をさせていただきました。非常にお元気で、やはり杉原千畝さんが早稲田大学のご出身ということで、杉原千畝さんの像なども、記念碑なども早稲田大学にあるものですからそれを訪問するとともに、やはり杉原さんがいたから私はこうやっておられるんだというようなお話をされておられましたし、そういうことを記念しての学位の授与だったというふうに思っております。

そういうことも踏まえて、コーナーにはメラメドさんを中心としたコーナーを設けて、また広く命の大切さ等々を、また杉原千畝さんの判断といいますか、そのときの決断、そういうものを。書籍にもなっておりますけれども、そういうものを含めて。それと、メラメドさんから、せんだって子供たちにとということでご自身の書かれました本をいただきまして、それぞれの学校にお配りをいたしているところでもございます。

次は、大韓民国・東海への職員派遣でございます。

これは恒例になっておりますけれども、昨年度はちょうど東海のほうは職員さんがいないということで来ていなかったわけでございますけれども、今年度は、私どもはやはり長年の姉妹都市であります東海のほうに職員の派遣をして、またいろんな行政の勉強、またいろんな情報交換ということで派遣をさせていただきます。

詳細につきましては、記載のとおりでございますので省略をさせていただきます。

発表項目につきましては、私のほうからは以上でございます。

【秘書広報課長補佐】 ありがとうございます。

それでは、ただいま発表させていただきました2つの項目につきまして質問を受けさせていただきます。最初に、幹事社様からお伺いをいたします。

【記者】 発表項目については特にはないです。

【秘書広報課長補佐】 それでは、皆様、ご質問ありましたらお伺いをいたします。

【記者】 事実関係の確認ですが、ムゼウムの入れかえ、展示、これはいつだったのですか。入れかえを実施しましたとありますが。

【産業経済部長】 3月28日でやりました。

【記者】 費用はどのくらいかかったんでしょう。

【産業経済部長】 済みません。ちょっと手持ちに詳細ございませんので、後ほどお知らせさせていただきます。

【市長】 ほとんどかかってないと思います。

【記者】 3月28日だと、前夜祭とか早稲田大学の学位授与は間に合わなかったわけですね。

【市長】 はい。

【記者】 了解しました。

それともう1点、職員派遣の件ですが、男性ですか、女性ですか。

【市長】 女性です。

【記者】 年齢は。

それは、じゃ後で教えてください。

以上です。

【秘書広報課長補佐】 ほかにございますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、フリーの質疑応答に移らせていただきます。幹事社様のほうからお伺いをいたします。

【記者】 きょう、定例会見、市長、最後ということなんですが、退任のときも会見はあるんでしたっけ。

【市長】 あるんかね、会見。挨拶とか、恐らく講堂かどこかで退任式というのを行うと思いますので、そのときには挨拶ありますけれども。

【記者】 記者会見の形というのは。

【市長】 退任会見なんてあるんかね。何せ今までそんなことは過去にないもんですから、前例がないんで。また記者クラブの皆さん方のもしお申し出でもあって時間がとれば、させていただいてもいいと思いますが。

じゃ、最後というのは訂正しますか。

【記者】 いや、いいです。

【市長】 定例は最後やでね。定例会見は最後。

【記者】 じゃ、きょうもう聞いちゃいますけれども、20年間振り返られて、ここはできた、ここはできなかった、やり残したことなどあれば。

【市長】 そうですね。私どもいつも言っておりますけれども、まず第5次の総合計画を策定させていただきまして、ほとんどできてまいりましたし、第6次総合計画もほとんど着手はできてきたかなというふうに思います。

ただ、やはり政策面でも、例えば東日本大震災という未曾有の予期せぬ災害も発生いたしましたして、私ども原子力発電所と共存共栄しているまちにとりましては大変大きな影響を受けたことは事実でございます。そういう意味で財政面の厳しい局面なども迎えましたので、今まで計画をしてきたとおりにはいけなかったかなと。例えば、いろいろ施設の中でもスポーツ施設の充実ということで、もっともっといろんなものをつくりながらスポーツの振興というふうに思っておりましたが、なかなかそれがかなわなかったということで、これから状況を見ながら、また新しい市長のもとでやっていただけたらというふうに思っております。

細かい点を挙げますとまだたくさんあるというふうに思いますけれども、ある程度はできてきたんじゃないかなというふうに思っております。産業団地につきましても、また近いうちにいろいろいい話も出るようでありまして、一番できなかったのは、任期中に全て完売ができればよかったんですけども、それが少しかないんですけど、今のところ予定的には入っておりますので、そう遠くない時期に売れていくというふうに思っています。また新しい産業団地にも着手をさせていただきましたので、そちらのほうも引き続いて市の職員さん、関係の皆さん方一丸となって、また新しい市長先頭になって、いい形で誘致活動を行って、雇用の場の創出を初め、まちの活性化のために頑張っていただきたいなということで、エールを送りたいと思っています。

【記者】 今、財政のお話出ましたけれども、敦賀1号機の廃炉は想定内で決まっていたことなんですが、2号機もつい先日、活断層という評価というか、規制委員会が改めて報告されて、2号機の再稼働もちょっと見通せなくなって、敦賀市にとって原発の交付金や固定資産税など今まで大きな財政の収納ウエート占めてきて、それが減るのは、どんどん減っていくのは間違いないんですが、次の市長に対して、財政面でそういう今まで当てにしていたお金がなくなることを踏まえて、具体的にどのように政策アドバイスされることありますか。

【市長】 私どもも東日本大震災以降の財政というのは、ある程度見通せたといえますか、悪い方向に見通せたものですから、財政運営についても、少しずつ市民の皆さん方にご負担をいただくような形で、標準スケールという言葉を用いながら取り組んできたところがございます。そういう意味では、まだ原子力行政というのは少し不透明な部分が残っておりますし、特に1号機の廃炉というのは、震災前というのは3・4号機の増設とあわせながら廃炉になっていくという予定でございました。そのあたりにつきまして、先ほど言いましたように国のこれからのエネルギー政策というものに少し左右されるところもございますので、そのあたりはしっかり次の市長にも見きわめていただいて、恐らく市議会、また住民の多くの皆さん方も、最新型でより安全な、安心できる3・4号機のほうに切りか

わっていくことは歓迎いただけるというふうに思います。また、財政面でもかなりの歳入部分も見込めるわけでありますので、そういうことを視野に入れてしっかり取り組んでいただくことによって市の財政もまた持ち直してくるんじゃないかなというふうに思いますから、ぜひそういうところには真剣に取り組んでいただきたい、このように願っております。

【記者】 先ほどの20年間の市長生活を、まだ終わられていないんですけれども、振り返ったときに、いいこと、悪いことを一つずつ、一番印象に残っていることを教えてください。

【市長】 そうですね、いいことは、やはり敦賀気比高校が優勝、私の、自分自身で思っておるんですけれども、いいはなむけ、また花道になったかなというような気がします。ちょうど私が就任したのは平成7年なんですけれども、平成6年に初めて敦賀気比が甲子園に出場しました。そして平成7年にはベスト4まで夏の大会で行きました。その後も敦賀高校も甲子園に出場していただきましたし、私、通算、甲子園へ何回行ったかなというふうに数えると、かなりの数、甲子園に応援に行かせていただきましたし、そのたびに大きな夢を与えていただいて、昨年夏は、いよいよ、ひょっとすると深紅の優勝旗がというような思いの中でおりましたけれども、残念ながらベスト4。ところが今回の選抜では紫紺の優勝旗を持って帰ってきたということで、これは20年の中で一番の大きな喜びといえますか、そういうものに匹敵するというふうに思いますし、喜びの中の一つであるというふうに思っております。

私、単純な、前向きな人間ですから、悪いことは余り。カニで報道されたかなというのはちらっと思い出したりはしますけれども、余りそういう悪い思い出は残っておりませんで、やはり楽しかったことや、よかったなという思い出はたくさんあります。大変有意義な20年間であったんじゃないかなというふうに思いますし、まちもそれなりに発展をしてきましたし、市民の皆さん方には、いろんな道路網の整備も進んでまいりまして、ここが便利になったね、ここがよくなったねというのと同時に、これは市民の皆さん方のお力ですけれども、よそから来た人が敦賀のまちってきれいですねと言っていたんです。例えば、ごみにしても余り落ちていませんし、道路、いろんなところがきれいに整っていますので、そういう意味では、市民の皆さん方のお力の中でそのようなまちづくりを進めてこれたんじゃないかなというふうに思っております。

悲しいことを言えば、やはり原子力発電所の問題がなかなかすっきり解決を任期中にできなかったなというのも残念な思い出の一つでございます。

【記者】 もう1点なんですけれども、きのう、4月1日に原子力機構の理事長と副理事長が、トップがかわられたということがあって新しい組織体制としてやっついていこうとしているんですけれども、それに対して何か思いは。

【市長】 お聞きしますと、今度の理事長さんは民間のほうから入られるということをお聞きをいたしております。やはり原子力機構さんには、ぜひ民のそういう力を取り入れていただいて、今までできなかったであろういろんな改革を真剣に進めていただき、もんじゅというものを研究開発炉として、特に廃棄物の減容化でありますとか放射性物質の低減をぜひ目指して努力をしてほしいなというふうに願っています。

【秘書広報課長補佐】 では、各社お伺いさせていただきます。何かございますでしょうか。

【記者】 どうも20年間お疲れさまでした。

先ほどの質問とも重なるんですけれども、市長就任後の歩みとちょうど重なるのが、もんじゅが初当選された年の12月にナトリウム漏れ事故を起こして、あと8カ月、9カ月ぐらいでちょうど20年になるわけですが、いまだに規制委員会などでそんな近々に命令解除をするなんていうことがあり得るわけがないみたいな雰囲気の発言を規制委員長がされていたりするんですが、もんじゅに対する注文だったりとか思い、今後こうなってほしいというような思いがあれば教えていただけないでしょうか。

【市長】 もんじゅにつきましては、私、ちょうど県会議員の時分、平成6年にいよいよ稼働するというので、いろんな式典が行われたりしまして、私も参加をさせていただきました。そしてしばらく運転をしておったんですけれども、市長にならせていただいた12

月8日の夜、もう忘れもしません。そういう連絡が入りまして、次の朝飛んでいったのを覚えております。それ以来とまっておりますけれども、一時はようやく稼働するというようなことでありましたけれども、その後もすぐ落下事故等もございましてとまってしまったわけでありまして、私が市長をしておった間、ほとんどとまった状態でいたなという事で非常に残念な思いでございます。

先ほど言いましたように、もんじゅというのは研究開発炉として重要な役割を担っておりますので、ぜひ新しい理事長のもとで本来の目的が達成できるようにぜひ頑張ってもらいたいなというふうに思っております。

【記者】 あと、追加でなんですけれども、先ほども原発が停止して経済がダメージを受けている中のまちづくりについて言及されましたけれども、3・4号機の増設についても、2号機の再稼働、もんじゅの運転再開についても見通せない中で、原発に過度に依存しないまちづくり、経済基盤というのが重要だと思うんですけれども、次期市長にとってどういうことを特に力を入れて進めるべきか。あと、原発にかわるような産業育成がどの程度道筋が見えてきたかというところを教えてくださいませんか。

【市長】 まず産業団地、第2の産業団地に今取り組んでおりますので、企業誘致をしっかりとさせていただいて、そこでの多くの雇用の創出、また税収というのを見込んでほしいというふうに思いますし、あとはやはり港の活性化、ポートセールスも私もしっかりと取り組んできたつもりではございますけれども、新しい港づくりもこれから進んでくるというふうに思います。ぜひ物流面でコンテナの数をふやしていただいて、多くの荷物の集荷を通じての経済の活性化なども行ってほしいなというふうに願っております。

原子力発電所については、やはり地方再生と言われる中で、それぞれの地方の特徴を生かして、まちづくり、地域づくりをと国からのいろいろなお達しもございますし、またそれにいろいろなメニューもあるようでございますし、そのあたりも十分私どもも精査をしながら積極的に取り組んでいってほしいなというふうに思います。

ただ、原子力発電所も私は重要な私どもの特徴だというふうに思っております。不透明な部分もございますけれども、やはり現に発電所もございまして、計画もあるわけがございます。また廃炉は廃炉についてのいろいろな産業も創出する可能性もありますし、そういうものを含めて、原子力とは当面いやが応にも、直ちにはなくなりませんので、長い年月をかけての廃炉もございまして、そういうものも一つのビジネスとして取り組みながら、また日本のエネルギーを考えたときの原子力のウエートというのは、先ほど言いましたが、なかなかはっきりしない状況をやはり早く打開をして、他の国に頼らなくても自前でつくれるエネルギーをしっかりと確保しないと、これも国家にとっては非常に大事なことです。それと環境問題も含めて、もっともっと地方からの声も発信をしてほしいなというふうに願っているところであります。

【記者】 あと1点だけ、確認でなんですけれども、先ほどのお話も聞いていますと、今までどちらかという原発にかなり経済的にも依存してきましたけれども、今後というのは港を生かしたりとか観光だったり廃炉ビジネスだったり、これまでどっちかといったら一本足打法みたいだったのを、いろいろな稼ぎ頭を何本も育てるようなことが必要なんではないか。

【市長】 いつも言うんですけれども、確かに原子力発電所のウエートは大きゅうございますし、いろいろな関連でいきますと、例えば宿泊とか飲食とかいろいろなものを含めると大きいことは事実なんですけれども、今までも私ども港湾都市でありますし、農林水産業をバランスよくやってきたつもりでございますが、そのバランスよくやってきた一つの柱の原子力分野の関連が今少し弱くなっていますので、当然ほかの分野からそれを補強しながらということ。よく勘違いされるのは、私どもも原子力発電所はありますし大きなウエートを占めていることは間違いありませんが、数字から見れば税収面云々といっても十数%。残り八十数%はいろいろなほかの産業で賄っているまちであります。

ただ、例えば小さな規模の町村で発電所があるところというのはどうしてもそのウエートが大きくなりますので、これはそれぞれのまちによって、立地の状況によって、それは違ってくるというふうに思います。敦賀は比較的バランスよくいろいろなものがまざっているけれども、その何本かの柱のうちの原子力が今少し弱っていることは事実でありますの

で、ほかの分野でそれを支えていくということは非常に重要だと思っています。

【秘書広報課長補佐】 ほかにございますでしょうか。

【記者】 河瀬市長、20年間、どうもお疲れさまです。

私は、河瀬市長の今後についてちょっとお尋ねしたいんですけれども、まだ政治家としてもお若いと思いますし、この4月で任期満了を迎えられた後というのはどのような、先ほどは一市民というようなお話もありましたけれども、どのようなプランを描いているのでしょうか。

【市長】 一市民としてしっかり次の市政を支えながら、また今までの経験もございまして、じっくり考えたいと思っております。

【記者】 今のところは未定というようなことですか。

【市長】 そうでございます。

【秘書広報課長補佐】 よろしいでしょうか。ほかにございますか。

【記者】 河瀬市長、20年間、お疲れさまでした。

その20年の任期なんですけれども、同時に全原協会長としての任期だったと思います。この20年振り返って、やはり東日本大震災の後、かなりいろいろ揺れる政策の中で発言される機会や物を考えられる機会あったと思うんですけれども、そのあたり振り返ってみての所感をひとつお聞きしたいんですけれども。

【市長】 全原協は、全国にあります立地自治体で構成をしながら、いろんな思いを今までかなり国に対してお願いをし、要望しながら実現をしてきた諸団体であります。そういう中の福島の方々があのような形で、今までまちづくりやいろいろなところで原子力というものが大きなウエートを占めていた中でああいうことが起こり、全くそういうことに頼れなくなり、また逆に避難生活を余儀なくされている福島の方方も同じ仲間でございますし、そういう意味では、ああいう事故の後しっかりみんなで支え合おうということで今もそれを行っている団体でございます。

敦賀市長というのは歴代その会長を仰せつかっておりますし、私の任期も実は来年の5月いっぱいぐらいでございます。ただ、敦賀市長としてですから、次の新しい市長がやはり次、全原協の会長になっていくというふうに思っています。その後のことは、またこれは役員さんで決めていきますのでどうなるかわかりませんが。

ただ、同じ発電所を持つ立地地域が、自治体の規模はさまざまではございますけれども、いろんな情報交換をしながら一致団結をして国にいろいろ働きかけをした成果、やはりこれは同じ思いを持つ者が力合わせて頑張ってきておる団体だというふうに認識をいたしておりますし、これからも、先ほど言いましたように、原子力発電所というのは政府のほうも安全なもの稼働していこうという動きの中で、恐らく今年度中には稼働の動きも必ず出てくるというふうに思います。そういう中で、また立地地域のいろんな思いをしっかりとまとめていただいて、国に対する要望、それと私どもも廃炉が決まっておる自治体もあるわけございまして、その廃炉に向けてのいろんな交付税、また交付金の措置についても、ソフトランディングな形で終われるようなという要望なども、極めてまた近いうちには実は行動を起こそうというふうになっておりまして、これからもこれは全原協全体としての課題でございますから、そういうものもお訴えをしながらこの会は進んでいくというふうに思います。

原子力発電所は、廃炉も含めていきますと、まだまだ日本の国の中で恐らく100年以上続いてくるというふうに思いますから、ぜひまとまっていたら、これからはしっかりと活動をとっていただけるように、私どもも側面から応援できましたら応援をしていきたいというふうに思っております。

【記者】 今のところ少し関連なんですけれども、全原協の会長として立地の思いを伝えてこられたということで、東日本大震災以降、国の対応を見て、立地の思いというのは十分に酌み取っていただけていると思うかどうかということと、国の対応ということと、あともう一つ、世論という部分においても、立地の思いというのを十分に酌み取っていただけているというふうに思うかどうかということをお教えください。

【市長】 まず世論につきましては、なかなかまだまだ原子力に対する、また東日本での原子力災害事故からの立ち直りといいますか、そういうものが見えていない部分もござい

ますので、世論は厳しいなというふうに出てきています。

国のほうとすれば、できる限りということでは対応をとっていただいておりますので、全原協としても要望する中で動いていただいておりますというふうには思いますが、まだしかし十分でないところもあるというふうに感じますので、引き続きまして全原協役員会の中でのいろいろと取りまとめをし、また国に対して要望はしていただけるものだというふうには確信をいたしております。

【記者】 もう1点なんですけれども、敦賀1号機の廃炉が決まったときに、市長は激変緩和措置として国に対応を求めていきたいというふうにおっしゃっていたと思うんですが、先ほど行動を起こしていきたいという話があったんですけれども、そういうことを求めていくというような認識でいいんですか。違いますか。

【市長】 今おっしゃっていただいたとおり激変緩和であります。いろんな課税する税について、本来なら停止、廃炉になった時点で切れてしまう分もございまして、続くやつもあるんですけれども、ぱっと切れてしまうやつを直ちに切れないような形で、少しずつソフトランディング的に終わらせていけるような体制がとれないか。これは敦賀の1号機だけではございません。美浜にも、全国に7基あるやに聞いておりますので、それは全原協全体としての問題であるというふうには捉えながら、任期中には行動を起こす予定でございます。

【秘書広報課長補佐】 ほかにございますか。

【記者】 話の流れを変えますが、北陸新幹線、敦賀駅開業が8年後という形で、私は敦賀がそれを成功に導けるかどうかというのは東口の整備にかかっていると思うんですけれども、それは次期市長に託される形になるとは思いますが、時間的に。

問題は、福井延伸を嶺北のほうでは2年早めてという論がいろいろ高まっているようなんですけれども、果たしてそれについて嶺南側は何も発言しなくていいのかという気がちょっとしています。福井駅で電車折り返し設備ができると、東京発で福井どまりの電車が将来多発するのではないかとするのは誰が考えても予想されることなんですけれども、それについて敦賀市、市長としては福井延伸2年前倒しはどのようにお考えなのか、お尋ねしたいと思います。

【市長】 まず、この延伸についてはかなり費用が必要だということを聞いております。ただ、その費用を考えても福井延伸というものが福井県全体にとってのメリットがあれば私は構わないというふうに思っております。2年先に開業するだけでございまして、当然その後も敦賀、そして敦賀以西についてもこれは当然進めていく問題でございますので。ただ、大きなお金がかかる、じゃ、それを誰が負担するかということの議論というのはまだされていないというふうに思っておりますので、国として、また県として、開業に向けて、例えば福井市中心として大きなメリットがある、その分、私どもで負担してでも早く開業するよということがあれば私は一向に構わないというふうに思っておりますし、早く開通することによって。

ただ、これは私いつも言っておりますけれども、福井でとまるというようなことをしますと、関西というものは変わってしまいます。要するに今、関西の経済圏というのは実は金沢までなんです。ところが金沢開業で恐らく金沢は東京に行ったと思います。それが福井でとまってしまえば、また東京へ出る。そういうことを関西の人たちが黙認をしてやるかということは、信じられないというふうには私は思っておりますので、当然関西の皆さん方と連携をしながら早く東京と大阪をつなぐ。このことに主眼に置いてやっていけば、2年前倒しであっても、またその後敦賀まで開業しても、そして敦賀から以西がどういう形になるかもわかりませんが、開業しても私は問題ないというふうに思っております。ぜひ関西地域の皆さん方も自分たちの圏域を守るといって、そういう意味で、ぜひ私どもとしっかりとコンタクトをとっていただけて連携をしていってほしいなというふうに願っています。

【記者】 ありがとうございます。

費用負担が福井市、受益者負担という形で、嶺北のほうを中心となるならば問題がないというお考えですね、確認すると。

【市長】 そうですね。これが例えば全部で、前倒しになるのにそういうものを私どもも

負担していこうとなりますと、それは少し市民の理解が得られにくいというふうに思いますので、ぜひそのあたりは開業して、今おっしゃっていただいたように受益者負担というような形で負担をしていただいて早く開業されても一向に構わないと思います。

【記者】 わかりました。

【秘書広報課長補佐】 ほかにございますでしょうか。

【記者】 追加で済みません。アクアトムで、たしか前、移管の話がおおむねまとまったと9月ぐらいに報道か何かに出ていたと思うんですけども、もう年度はまたいじったので、なぜここまで時間がかかっているのか、もう少し詳しく教えていただけないでしょうか。今までは県と調整事項がまだ残っているということだったんですけども、じゃ残っているのは何なのか、いつごろがめどになりそうなのか、もう少し踏み込んでお答えいただけないでしょうか。

【副市長】 確かにおおむねの施設を残して県と市がイーブンで持つ。そして維持管理については敦賀市は持たないと。そういうところの合意というのは9月の県議会、市議会においてそれぞれ責任ある方が発言されています。その枠組みは変わらないんです。それをもとにして細部を詰めていく段階において、県の見解と市の見解が若干違ったり、あるいは機構さんや文科省も含めて無償でいただくことに対する条件等があるわけですね。そこら辺のことが幾つか複雑に絡み合っていて。というのは、敦賀だけじゃないわけですね。ほかの全国には幾つか見直しで類似のものがあるわけで、それとの整合性の問題とかいろんな形で少し問題解決できないところがありまして、今まで手間取ってきているんです。

しかし3月になりまして、少しそういう事務的な話し合いがスムーズにいくようになっていきます。当然目標とすれば6月、新しい市長が決まって6月ぐらいをめどに、しっかりとみんなの合意がなるように、これは努力していくべきだというふうに思います。

【記者】 そうしたら、市の持ち出しがない、維持管理は市は負担しないということでは関係者が合意はできているということですか。

【副市長】 それは合意されています。

【記者】 残りの残っているところではどんなところの条件を詰めているのでしょうか。

【副市長】 無償で貸与というのは幾つか文科省も条件をつけていますし、それからお互い県と市が所有するにしても、突発的な事故があったときの責任はどうするのかとか、あるいは敦賀市が一方ではにぎわいということも市民の声としてあるわけで、にぎわいを色濃く出しちゃうと無償貸与の条件にひっかかる部分もありますね。そういうかなり事務的なところがあるんですね。けども、もう首長同士でそういうところの判断は一定のものとして9月に見解が出ていますから、それに基づいて、あとは事務的な話だけが残っているということなんです。

【記者】 わかりました。

【記者】 今のアクアトムに関連してなんですけれども、知事と河瀬市長が提案理由でこれを発表されてから既に半年たっておりますし、閉鎖になってからカウントすると丸3年がたったというタイミングです。半年間動かない状況にあるというのは、市の見通しとしては、こんなに長くかかるはずじゃなかったということなのか、それともこれだけ時間をかけて検討すべき問題で、特に遅くなっているというような印象はないということなのか、どんな受けとめ方なんでしょうか。

【副市長】 この判断は、結局は利用の仕方とか無償譲渡はどういうことなのかということ整理していくと、やはり県は県議会、市は市議会、そういう議会との対応の仕方と申しますか、それを法的にきちっとやる必要があるだろうというふうに思います。そこにおいて県と市の考え方が若干違っていた部分がありまして、その入り口論で少し手間取っていたことは事実です。でもそれもほぼ解決できましたので、その後の事務的なものが先ほど申し上げたようにスムーズにいくだろうというふうに思います。そして、6月ぐらいまでにはきちっとしたものになっていくだろうというふうに思っています。

【記者】 6月の合意というのは、県と市と国と機構、4者での正式な合意が6月ごろということになるのでしょうか。

【副市長】 当面所有者は、今はアクアトムを持っているのは機構なんですよ。そうい



う中を今度は施設を移管して県と市が責任を持ってやっていく。一方では、それを無償貸与するのは文科省なんですね。この4者はそれぞれの主張があるものですから、それぞれが満足するような合意点というのが必要なんですね。そこに若干時間がかかってきたということですし、それが冗長であったというのならご批判を受けるといふ。それはしようがないというふうに思います。もう少しスムーズにやるべきだったというふうな反省はございますけれども、やっぱりとまっていたことも事実ですし、それが動き出した以上、速やかに一日でも早く、当面6月の県議会、市議会を目標にしっかりやっていくというのが我々行政に与えられた仕事だというふうに思っています。

【秘書広報課長補佐】 ほかにございますでしょうか。

【記者】 ちょっと話変わるんですけども、ことし、平成の合併から10周年ということで、敦賀市は直接的には関係ないんですが、当時は嶺南一市構想というので準備会を設置していたみたいで、そのころの新聞記事などを見ると、河瀬市長、舞若道が開通したぐらいに嶺南一市になればいいなというふうにおっしゃっていたようで、振り返ってみて敦賀市として、原発もちょっと情勢変わってきましたし、合併しなくてよかった、合併したほうがよかったとか、ちょっとそこら辺の所感があつたら教えてほしいなというふうに思います。

【市長】 今おっしゃるとおり、10年前には嶺南一市構想というのがございまして、いろいろ議論もされましたけれども、あの当時ですと私は嶺南地域は特に原子力発電所を持っておる自治体が4つ、持っていない自治体が4つ、まだ合併前でしたからありまして、なかなかいろんな思いが至らず、もちろん私も、まずその前段として交通が非常に便利が悪いと。高浜から敦賀へ行ったり来たりするのにあの当時は1時間半以上かかりましたので、なかなかそういう連携は難しいという中で、舞若道が開通すればそういう形も可能かなというふうに当時は思っておりましたけれども、なかなかそのあたりの中で平成の合併も行われ、若狭町さんが誕生し、新しいおおい町も誕生した中で行政運営をしまいったところでございます。

ただ、広域的ないろんな課題というのはありますので、今も嶺南広域行政組合の中で、合併というのは、合併したまちが誕生した中でもなかなか難しいねといういろんなところも出てまいりまして、じゃ嶺南を一つにしてうまくいくのかなという思いがなると、そちらの不安のほうやはり大きくなってまいりまして、嶺南を一市にやるというのは極めて難しいなという方向にはなっておりますけれども、行政事務、またいろんなごみ処理含めて、これから委員会も実は立ち上げまして、広域行政組合、広域で組合を立ち上げていろんなそれぞれの行政課題をやっていこうということの委員会を立ち上げましたので、そう遠くない時期にそういうような形で広域行政組合という形でのことはこれからできるんじゃないかなというふうに思います。一市構想は一つの理想であります、なかなか距離が近くなっただけでは難しいなということを感じております。

合併はしてよかったか、しなくてよかったかなというのは、しておりませんのでわかりません。

【記者】 ありがとうございます。

【秘書広報課長補佐】 ほかにございますでしょうか。

【記者】 新幹線のルートのことについて伺いたいんですけども、中池見湿地を通る新幹線のルートに関してなんですが、鉄建機構さんはルートを見直すという考えを示されて、今後、市なり県なりと協議していくというようなことだったんですけども、何か現時点で接触というのはありましたでしょうか。

【市長】 今のところはないようでございます。私も見守っている状況です。

【副市長】 委員会が行われた、その整理をやっているんだと思いますけれども。

【記者】 今後、見直し、新しいルートを検討していく際には、市としてはどんなふうにかかわっていくんですか。

【副市長】 委員会ではいろんな議論されて一定の結論が出ているので、まずそれのお話を正式にお伺いしてからだというふうに思っていますけれども。やっぱりみんな委員会を尊重するというような立場ですよ。

【記者】 今回のルート見直しは、なるべく中池見湿地への影響を減らすということのよ

うですが、それでも登録エリアは一応通る認可ルートが基本になるということのようなんですけれども、新幹線のルートはもっとこうあるべきであるとか、例えば全然関係がないところを通すべきであるとか、何かそういったお考えというのはおありでしょうか、市長。

【市長】 それはございません。今までの委員会の中で、極力中池見に影響が出ないようにということで皆さん委員会の中でやっておりますので、そのことを尊重しながらいきたいと思ひますし、私どもはあそこうんぬんよりもっとあちらへこちらへということはお思ひておりません。

【秘書広報課長補佐】 ほかにございませんでしょうか。

【記者】 話がらつと変わっちゃうんですけども、選抜高校野球で、先ほど市長も最初に言われたんですけども、敦賀気比高校が初優勝して、かなり地元に対してもにぎわいというか、そういうのを持ってきてくれそうな雰囲気もあるんですけども、なかなかそれができないという状況にあるという、市としてのお受けとめというのを改めてちょっとお聞きしたいと思ひまして。

【市長】 これは、でも市民の皆さん方の気持ち的には、おめでとうという思ひと、いろんな感動を持っていますので、そういうあたりで、じゃ職場の仲間で気比高校のお祝いをしようじゃないかということを出ていただいたり、例えば行ったお店でおめでとうってちょっとぐらいサービスをしてくれたり。大っぴらに優勝記念何々というものは、やはり控えていただかなくては仕方ないと思ひます。

【記者】 高野連からそういうお話があったことはご理解いただきたいというか、そういうところ。

【市長】 そうですね。それはもう再三再四来ております。勝つたびに言ってきていますから、これはもう仕方ない。恐らく全国、何年か前から、今ちょっと調べていますけれども、そういうふうになっていると思ひます。どこを見てもそういうことはやっていないと思ひます。

【記者】 今後、何か市として改めて……。

【市長】 市としては、広報紙で、よくやったなということとか、また民間のテレビとかでは、おめでとう何々とやっていますので、新聞とかでもやっていただいていますから、それで大変ありがたいことだと思ひております。

【秘書広報課長補佐】 よろしいでしょうか。ございませんか。

【産業経済部長】 先ほどの派遣の職員の年齢ですけども、女性でございますので、31歳でございます。

それとあと、ムゼウムのリニューアルの費用でございますが、動画の入れかえに約90万、それと展示の入れかえに20万、合計約110万かかっています。

以上でございます。

【秘書広報課長補佐】 ありがとうございます。

これをもちまして市長定例記者会見を終わらせていただきます。

午前11時50分 終了